

---

# 蒼賢のレスティリア

アキヒト

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

蒼賢のレスティア

### 【Nコード】

N3691J

### 【作者名】

アキヒト

### 【あらすじ】

正月の初詣に出会った少女に異世界に落とされた穂村一は、魔道士たちが賢者を目指す帝国、レスティアにたどり着いた。そこで彼が目指すものとは……。 牢屋から始まる異世界ストーリー。

## 序話 夜明け前

息を切らせながら、俺は山道を歩いていた。

大学三年目の正月に、実家のある四上町よつかみに帰ってきた俺は、一年ぶりに星守神社ほしもりの裏手にある山を登っていた。深い緑色を湛えた山は急斜面が多く、まだ夜が明ける前のこの時間は人を拒んでいるようにも思えた。

「ふう、やっと着いたか」

意識せず、言葉が口から漏れる。

山頂は、少し開けていて崖が見えている。崖の手前には背の高さの数倍はあろうかという岩が鋭くそびえ立っている。大岩の前には小さな社があり、それが今日の目的地だった。

2

「残りの学生生活が有意義ありますように」

社の前でひざをつき、お祈りする。

山の上ということもあり、神社はここにはないが、昔から四上よつかみにいる人間は、山頂の社にお祈りしたほうが御利益はあるというのだ。

ふと見ると、大岩の裏側から光が差ししているのに気がついた俺は、せっかくだから朝日でも見ていくかと山仰ぎ見た。

「あれ？」

大岩の上に誰かがいた。巫女装束を着ているから神社の関係者なのだと思った。恥ずかしいところを聞かれたな、と頬をぽりぽりと搔

いていると少女が振り返るのが見えた。長い漆黒の髪に、まだ若い朝日が透けて星空ように綺麗だ。

「刺激のある、学生生活を祈ったのね？」

小川のせせらぎのように、心地よい声で少女が話しかけてきた。

「毎年、ここで一年の目標を立てているのさ、君も何か願懸<sup>か</sup>けしたの？」

目標とはちよっと、違うかもとは思ったが気恥ずかしさを隠しそういつて肩をすくめた。

「ええ、そうね」

少女は、少女は少し考えるそぶりを見せた後、いたずらっぽい笑みを浮かべて口を開いたかとおもつと。

「楽しいかどうかは分からないけど、退屈している暇はないと思うわよ 穂村<sup>ほむら</sup> 一クン<sup>はしむ</sup>。それに、もう少し学生生活を楽しんでもいいのじゃないかしら？」

「え？」

予想外の回答を返されたことと、名前を呼ばれたことのどっちが理由であったかわからないが、思わず一歩足を踏み出してしまった。

体が重さをなくすと同時に、下半身からむずがゆいような心細いような刺激が襲ってくる。

「な

！  
」

初日の出に照らされて、伸びた大岩の影に、落ちていた。

そして、意識も落ちていった。

序話 夜明け前（後書き）

感想、誤字脱字あればお願いします。

## 第一話 ハジメは牢屋から

「くそ！ちくしょう！」

思わず、悪態が口から漏れる。だって、そうだろう？ 今、俺は牢屋にいる。何故か 十中八九あの黒髪巫女神のせいだ。しかし、牢屋ってことはないだろ？ セオリーを無視してやがる。普通、こういうときは、出会いのイベントがあるってもんだろっに。

「少しためしてみるか」

それでも親父の格闘好きのせいで、六歳から合気道と空手をやらされているし、異世界に飛ばされたのなら、この扉を殴り壊せるかもしれない。

「せい！」

丹田（へその下あたり）に力をこめて全力の正拳突きをお見舞いする。ずっしりとした手ごたえが、拳の先から伝わり……。

「~~~~~！！」

痛い！ 痛い！ 痛い！ 痛い！ 声は出ないが、魂が絶叫する。幻想と拳は打ち砕かれ、転げ回る俺がいた。

転げまわってから、右手を突き出して唸ったり、額に指を当てて歯軋りしたが、何も起きないことを確認した俺はとりあえず横になり状況を観察することにした。

「出る！」

少し向こうで、看守が叫んでいる。ハツッと日本語と違うことに気がつく。そして、俺もその言葉が、普通につかえることに。いや、重要なのはそこじゃない。

「すみません！ 助けてください！！！」

「……」

しかし、看守は反応しない。が、諦めたら一生、ここで過ごす羽目になるかもしれない。

「看守さん！ 話を聞いてください。」

「おめえさんの裁判は、まだ後だよ。わすらは、なんもできんよ」先頭を、あるいていた眉毛の長い年配に見える看守がそれだけ答えてくれた。

「ちょ、マジで攫われてここにいるんだけど！」

正確には、落とされたのだがこの際どうでもいい。そのあと必死に叫ぶ俺を無視して、看守たちはでていってしまった。

どのくらい時間がたっただろうか？ 格子の隙間から伸びる月の光で目が覚める。ああ、夜風が冷たいなとひとつ呟いたときだった。

ガンゴン、という音がして顔を上げると眉毛の看守がいた。

「本当はいかんのじゃがのう、おめえさん少し散歩がしたくはないか？」

「はい？」

このじいさんは、何を言っているんだ？ まあ、外に出られるな

ら牢の中よりは幾分かはマシだけれども。  
さて、どうしたものかな。

「はやくする」

俺の言葉を肯定と勘違いしたのかな？ 人の話を聞かないで扉を開けちゃったよ。

「え、あ、はいはい。」

急かされて俺は、暗闇の牢屋から銀月の光が指す方に一步を踏み出した。

かつかつかつと、廊下を歩く。

「じいさん、どこにいくつもりなの？」

「ブラウエ・アルタじゃ、まだ五十年は生きるつもりじゃが？」

「あと五十って、ジイさんは人間やめて物の怪にでもなるつもりか  
よ」

「黙って、ついてこい」

しまった、驚きのあまり口から本音が出ってしまった。だって白に近い長い眉に、輝く丸頭だけ、頭の輝きから燃え尽きる前の蠟燭を連想しても俺のせいじゃないってもんだろ。

「二二じゃ」

そんなことを考えていたら、目的地に着いたらしい。それでは、入るとしますか。

「ふうん、あなたがそうなのね。身なりもいいみたいだし、食うに困ったわけでもないのに牢に放り込まれた軽拳な最近の若者って

のは」

部屋の中にいたのは、琥珀の瞳をした青髪の少女だった。俺は、一瞬で目の前の少女から視線をはずせなくなってしまう。

眼を離せずにいたのは、明かりに映える青空や琥珀の美しさにフアンタジックな衝撃を受けたただだからではない。少女の瞳が、獲物を品定めするように縦にスッと伸びたからだ。

「さて、私はミント・ディー・レスティア、第十三代目のこの国の姫よ」

「俺は、穂村 一、なぜか牢屋に放り込まれていた学生だ……です」

「ホムラハジメ」

名前をつぶやかれて、じっと見つめられると照れてしまうな。ここは何か言わないと思っていると、スッと前から注がれていた威圧感が柔らかくなった。気がつくともミントの瞳が海のような青い色になっていた。

「ホムラは、弱いね。それで学生になれるなんて驚きだけども面白いわ。誰にさらわれてきたのか、それから聞くとしましょうか。」

ミントさん？ その期待感たっぷりな笑顔はナンデショウ？

「まず、ひとつ訂正したいんだけど」

「何かしら？ 私の言ったことに何か間違いがありました？」

また、瞳が危険な光を放ちスウッと細められる。

俺の周りだけ重力が異常なのだろうか？ 失言ひとつで自分の命が狩られそうだよ。しかし、退路は自分で閉じたあとだ。

「え、と、ホムラは、ファミリーネームなので、できればハジメと

呼んでほしいかなあ、とか、あはははは……」

ヘタレと呼んでくれて結構、ミントさんの眼が怖すぎて、弱いといわれたことに突っ込みを入れるなんてできなかったのですよ。

「そう。嘘はいつてないみたいなので聞いてあげる。でも、まずは私の質問に答えなさいな、それ以外は死刑の嘆願書と同じにしてあげるわよ？ まあ、死なせてあげないけど」

俺の、必死の台詞に対してさらりと怖いことをおっしゃりました。聞きたいこととか突っ込みたいことはいっぱいあるけども、まずは安全第一だと思うのですよ。だから、初詣に山に登ったこと、黒髪の少女のこと、穴に落とされたら牢屋に入れられたことを話した。

「そう、わかったわ。本当に無実のようね、それにこの世界の住人じゃないのも本当のようだよ」

「やけに、あっさり納得するんですね。」

「ええ、私の“竜眼”の前では嘘など意味はないわ  
「竜眼？」

「ミント・ドラゴンアイズ・レスティアア、そう私を呼ばせるものであり、畏れさせるものよ」

「さつきは、ディーっていつてなかった？」

「あら？ 思ったより記憶力はよいのね。まあ、嘘じゃないわよ。あれは“竜の力”を持つ者が名乗る総称みたいなものだから」

「そうか、アレにはそんな力ちからみたいなものがあつたのか。本当に、嘘をつかなくてよかった。」

「まあ、あなたをこちらに連れてきたのはネフティス様のようなから、そう簡単に異世界に帰れないと思うけど、あなたはこれからど

うするつもりかしら？」

「なにをしたらいいのか、正直分からないよ。それに、ネフティス様って？」

「星を統べる女神であり、運命や時間を司る女神でもあるわ。星神……人に近い神たちの主神といったところかしら？」

「人に、近くない神様もいるの？」

なんとなく気になったので聞いてみる。

「ええ、いるわよ。太陽神ソールと月の女神セルナを頂点とした“世界の理”を説く聖教会の流れに従った神々がね。そうね、賢者を目指す魔術師たちには信者が多いわね」

やっぱり、ファンタジーな世界なのか。魔法が、あるってことは俺にも仕えたりするんだろうか？

「俺にも、魔法は使えるのかな？」

「才能はないみたいだけど、杖を手に入れば使えるわよ。杖は、この帝都の学校に入らないと手に入らないけどね。だってそうでしょう？ 誰もが簡単に魔法を使えたら危ないでしょう？ 逆に、杖があればこの国では身分証明にもなるのよ」

そういうと、ミントさんはニツと笑う。ああ、心臓に悪い笑いだ。絶対に、何か悪戯を企んでそうなのに、わくわくしてしまう、そんな笑みだ。

「あなた、三か月時間をあげるから何か成果をだしなさい。そうしたら褒美として学校に行かせてあげるわよ？ 帰るためにも学校に

行く必要があると思うわ」

そう言われると首を縦に振るしかない。しかし、成果って一体何をしたらいいのだろう？ そう思っていると、ドアが開きブラウエ爺さんが入ってきた。

「デー様、そろそろよろしいじやろうか？」

「ええ、いいわよ。とりあえず罪人ではなかったみたいだからしばらくあなたに預けるわ。この国の人間じゃないからいろいろ教えてあげて。」

ハツと直立不動の姿勢でかしまつてみせるブラウエ爺さん。

「フラムにもよろしくね。」

「わかりますが。ですが、あの子をあまり甘やかさないでやってください」

そういって、ブラウエ爺さんは苦笑いしている。

まあ、このお姫様の甘いところなんて余り想像できないのだけでも。俺に向かっていている視線なんかは絶対的捕食者のソレだぜ。

「そういえばハジメ、まだ言っただわね。」

そう言っつて、青い瞳がにっこりと微笑むと、俺は少しドキッとした。これがなければ、嫌いになれるのに。

”竜眼”じゃない彼女の瞳も飛び道具だよ、まったく。

「蒼き賢者の帝国、“レスティア”にようこそ。あなたの活躍を期待しているわ」

「どこまでできるかわからないけど、頑張ってみるよ。自分のために」

そう言っ、 部屋を出た俺は ネフティス 運命の女神に愚痴をこぼした

ああ、 俺はなんとという化け物に捕まってしまったのだろうか。本当に、” 退屈している暇はない “ と言ったあの小さな神様の予言がかなってしまいそうだ。

## 第一話 ハジメは牢屋から（後書き）

まだまだ弱い主人公には、これから頑張ってもらおうとしますか。  
感想、誤字脱字お待ちしています。

## 第二話 夜明けと魔法のスペクタクル

「あー、ほんつとに今日は疲れたぜ」

「若けえものが何を言っているのじゃよ。 おお、ここじゃ」

ドアをあけるとカランコロンと音がして、家に主が帰ったことを知らせる。トテトテと奥から音がしたかと思うと、可憐な少女が出てきた。

「おじいちゃん、おかえりー。 あれ、お客さん？」

桜色のふわつとした髪と、やさしい笑顔が印象的だ。首をかしげるそのしぐさが小動物のようでまたかわいい。

「姫様にたのまれての、しばらく預ることになったんじゃよ。 わしは、しばらく忙しいのでの面倒をみてやっておくれ」

「ミント…、いえ、姫様のお知り合いですか。失礼しました、私はフラム・アルタですよろしくね」

そう言つと、フラムさんにはっこり笑ってくれました。

「俺は、ハジメ・ホムラだ。よろしく頼むよお嬢ちゃん」

そう言つて右手を差し出すと、フラムは頬を膨らますと腰に手をあてている。

あれ？ 握手はダメだったのだろうか。 そう思っていると。

「お嬢ちゃんじゃないわよ、フラムよ。 いつも、年より若く見られるけど、同じくらいの歳の男の子にお嬢ちゃんはちよつと傷つくわ」

ふむ、改めてフラムを見る。 年齢……、多分俺より五、六才下。

ちよつとまで、そう思つて自分の手を見る。

いや、なんとなく分かつたつもりだ。

いつも着てる服がちょーっと大きいか何とか、靴の履き心地が悪いなどか思っていたんだ。

思い出せ、俺。姫様は、あいつネフティスのことなんて言っていたっけ？  
たしか、こつ言った筈だ。運命と時間の女神って。

「元気出してください、ハジメさん」

あのあと、鏡を貸してもらった俺は愕然とした。だって、そこには昔の俺がいたのだから。

それはもう、絶叫するくらいに。そのあと、事の次第と異世界からきたのだということをつラムに話した。『姫様が、そうだと云ったのなら本当なのでしょうね』とあっさり納得してくれたつラムは優しく慰めてくれる。

「小僧、メシでも食って早く寝るのじゃな。明日は星送りの日じゃから朝は早いぞ」

「星送り？」

「えっと、どこからせつめいしたらいいのかな？」

つラムが考えこんでいると、爺さんがアドバイスをする。

「季節のことからでええんじゃないかな？」

「そうですね、じゃあ」

とつラムが言って話し始めた内容は、こついうものだった。

一年は三百六十五日とあちらの世界と同じようだった。しかし、

水の季節、風の季節、火の季節、地の季節と九十日ごとに移り行く。そして、最後の五日間が星の季節なのだという。

星送りとは、新しく始まる年の夜明け前に行く儀式のようなものらしい。俺たちの感覚で言う初詣みたいなものだろうか？

次の日の朝、まだ早朝とも言えない時間に起こされた。まだ、半分以上眠っている俺に、フラムは小さなベルを渡してくれた。見ると、フラムの手にも同じものがあつた。

「これは？」

俺が尋ねると、フラムはにつこりと微笑んで唇に人差し指を当てた。

「まだ、鳴らしちゃダメよ。私が合図したら一度だけ鳴らすの」

それがどういう意味かは、分からないがとりあえずうなづく。

「それじゃ、表に出ましようか。きつとみんなもそろそろ出てくるころよ」

俺は、フラムについていく。

そして、玄関を出ると他の家からも同じようにベルを持った人たちが、玄関まで出てきていた。

「おや、フラムちゃん。その男の子は、恋人かい？」

「ちがいますよ、カティおばさん！」

全力で否定されると、分かっていてもおちこむなあ。

などと思っていると、人垣のほうから誰かが声を上げた。

「お、そろそろだ」

その声にみんな、同じ方向を見る。

つられて、俺も同じ方向を見ると一条の白い光が天に伸びていた。

「ハジメさん、あの光が消えたらベルを鳴らしてください。一度だけ」

「あ、ああ。」

俺が、うなずくと同時に光は細くなり、

やがて消えた。

リ

ン

とベルの音が一面で鳴る。音で世界が震えた気がする。

動物や木、いや神や世界でさえ目を覚ましたのではないだろうか

? 世界が神聖さで包まれた、そんな錯覚でさえ覚える。そして、視界が光に包まれる。地面や、家が輝いて見える。渾身のイルミネーションでさえこれに匹敵させるのは難しい。などと思っていると。

「ハジメさん、手を上に向けてください。そして一言、星を送る、と」

そう言われ、手を天にかざした。

「星を送る」

そう、つぶやくと自分の中の何かが一面の光が融合し、一条の流星となって空へと消えていった。空には、俺の光とは別に色とりどりの流星が天空を駆け抜けていく。

俺が放心していると、西の空より蒼い光が東の空より飛んでいき  
夜空はカーテンをめくられるがごとく、明けていった。そして、太  
陽はすでに東の空たかくにあった。にこの経験だけは、間違いな  
く言える。異世界にきた甲斐があったと。

「ハジメさん？」

フラムが少し心配そうにのぞいてくる。

「大丈夫、すこし腰を抜かしそうになっただけだよ」

そう俺が言うと、フラムはほっと息をつき、何かを思いついたよ  
うに微笑を見せた。

「それじゃあ、次は私の朝ごはんを腰をぬかせてあげますね」

フラムは俺の袖をつかむと、いそいそと家の中に入っていった。

## 第二話 夜明けと魔法のスペクタクル（後書き）

どうでしたでしょうか？異世界の新年行事です。  
異世界であっても、お祭り騒ぎは楽しいものです。  
しかし、話が進んでない気がしないでもない。

感想、誤字脱字などあればお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3691j/>

---

蒼賢のレスティア

2010年10月21日22時08分発行